



TITLE:

詩人と妻：中唐士大夫意識の一断面

AUTHOR(S):

中原, 健二

CITATION:

中原, 健二. 詩人と妻：中唐士大夫意識の一断面. 中國文學報 1993, 47: 64-102

ISSUE DATE:

1993-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177549>

RIGHT:

詩人と妻——中唐士大夫意識の一断面

中原健 二

佛教大學

はじめに

中國の文學史において、國家の政治を擔うべき知識人（士大夫）の個人としての感慨や思索のあとをしるした作品が、個人の名のもとにまとまって傳えられるようになるのは、漢代以後のことといつてよいだろう。かれらはさまざまな題材を作品にしたが、そのなかには當然ながら男女間の愛情も含まれていた。儒家の考え方も、たとえば『禮記』禮運篇に「飲食男女は、人の大欲焉に存す」といい、『易』序卦傳に「天地有りて然る後に萬物有り、萬物有りて然る後に男女有り、男女有りて然る後に夫婦有り、夫婦有りて然る後に父子有り、父子有りて然る後に君臣有り」というように、男女間の愛情、とくに夫婦間の愛情を肯定するも

のであったこと、言を俟たない。しかし、男女間の愛情を肯定することと男女間の愛情を文學作品に表現することとは、必ずしもストレートに結びつかない。とくに士大夫たるものが、宮女や妓女を對象にするならいざ知らず、自らの妻を題材にしたり、妻に對する愛情を表白する、言い換えれば自らの閨房の内に關わることを臆面もなく語るのは、あまりほめられたことではなかったと考えられる。^①とはいふものの、その種の作品が全く作られなかったわけではもちろんない。すでに後漢の秦嘉に「贈婦詩」があり、晉の潘岳に「悼亡詩」がある。しかし、以後唐の前半期まで、その數は決して多くない。やはり、妻を對象にしたり、妻への思いを表白する作品を書くことは、士大夫にとって憚られることだったようだ。あるいは、自らの妻を取り上げることなど、多くの士大夫の意識には上らなかつたのだといった方が、より正確ではないかとさえ思える。ところが、ことがらは中唐期を境に明らかに變化を見せはじめる。そして、この變化は中國的近世の始まりとされる宋代になると決定的となる。宋人は一般に自らの妻を語ることに躊躇

を示さず、かえって己れの義務であるがごとくまでいうのだが、それは近世士大夫に共通した意識の表れと考えられる。^②とすれば、中唐という時代の重要性がおのずから浮かび上がってくるだろう。

(一)

自らの妻への心情を公言することについて、士大夫には一種の自己規制があったと思われるのだが、その規制が解かれるきっかけとしてまず第一に考えられるのは、やはり妻の死であろう。妻が現に生きている生身の存在ではなく、幽明を隔てる存在になったとき、士大夫の妻への心情は死者への哀悼というかたちを通して、表現を獲得するのである。文學史上、この種の作品の元祖とされるのが、晉の潘岳（二四七―三〇〇）の亡き妻楊氏を悼んだ「悼亡詩」三首（『文選』卷二三）である。潘岳の「悼亡詩」については、すでに詳しい論及がいくつもなされているので贅言を要すまい。^③ただ、ここで一言觸れておくならば、「悼亡詩」三首の連作は、たとえば、妻の生前の姿を形象化するというような

詩人と妻（中原）

方向では作られていない。季節の移ろいを背景に、妻を失った悲しみそのものを表現することにひたすら没入している。亡き妻そのものではなく、〈妻の不在〉に關心が集中しているかのである。その點ではやはり哀詠に巧みと評される潘岳の代表作のひとつたるに恥じない。潘岳にはこのほか「哀詩」（『藝文類聚』卷三四）及び辭賦體の「悼亡賦」（『藝文類聚』卷三四）「哀永逝文」（『文選』卷五七）があつて、いずれも楊氏を悼んだものと考えられる。同時期には孫楚（？―二九三）の「除婦服詩」もあるのだが、妻を悼む作品にこれほど力を入れた例はほかにあるまい。題材面からいえば、潘岳は當時まことに特異な存在であつたといつてよいだろう。ともあれ、潘岳のおかげで亡き妻を悼む（悼亡）というジャンルが開拓されたのである。そこで、以下この〈悼亡〉の歴史を簡略に逐つてみよう。

まず潘岳に半世紀ほど遅れる徐廣（三五二―四二五）に「悼亡賦」（『北堂書鈔』卷一五八）があるが、惜しむらくは四句を存するのみである。ついで宋の鮑照（四二二―一六五）に「傷逝賦」がある。現存資料から見る限り、はじめに追隨

者の現われたのは賦の方だったようで、詩は梁の沈約（四四一—五一三）と江淹（四四四—五〇五）に至って出現する。

「悼亡」及び「悼室人」十首がそれである。いずれも潘岳の「悼亡詩」を模倣するものといえるが、江淹がその「雜體詩」のなかで潘岳を取り上げ、擬作の對象を「悼亡詩」としたのは有名である。入谷仙介氏は沈約よりも江淹の方に、潘岳を乗り越えようとする意欲を認められている。^⑤また同じ梁では、沈江二家に少し遅れる蕭子範に「傷往賦」

〔藝文類聚〕卷三四）がある。さらに庾信（五一三—八一）に

「傷往」二首があるが、六朝期の作としてはおそらく最後のものであろう。そして、隋の薛德音（？—六二二）に「悼亡詩」のあるのを最後に〈悼亡〉作品は姿を消し、それが再び作られるようになるのは中唐期を待たねばならない。

以上、西晉後期から中唐期に至るまでのおよそ四百五十年ほどの間に、九家の〈悼亡〉作品が残されていることになる。^⑥通時的現象として〈悼亡〉の傳統は確立されたと見てよいだろう。しかし、數としてはあまりにも少なく、共時的現象としては捉えられない。やはりこの時期は、〈悼亡〉

という場は保障されていても、自らの妻を語ることに對しての士大夫の自己規制、あるいは無關心の度合いが、相變わらず強かったのではないかと考えられる。

（二）

初盛唐の空白期を経て、中唐に至ると、〈悼亡〉作品を再び見ることが出来る。管見によれば、戴叔倫（七三二—七八九）の次の詩が最も早い例であろう。それは「悼亡」あるいは「傷逝」などという六朝以來の題を持つものではないが、廣い意味で〈悼亡〉といって差し支えあるまい。

妻亡後別妻弟

楊柳青青滿路垂

楊柳青青として路に滿ちて垂るる

も

贈行惟折古松枝

贈行 惟だ折る 古りにし松の枝

停舟一對湘江哭

舟を停めて 一たび湘江に對いて

哭す

哭罷無言君自知

哭し罷って言無し 君は自ら知らん

妻の死後その弟に贈った詩で、妻を喪った悲哀を正面き
って取り上げてはいないが、末句はその悲しみを十分傳え
ている。これまでの〈悼亡〉は、「悼亡」や「傷逝」といっ
た詩題で潘岳以來の傳統の枠内にあることを明示して、妻
を喪った悲哀を正面きうたうからこそ、士大夫の文學
作品たり得たという一面があると思う。そのような一種の
身構えた、ことさらの營爲としてではなく、〈悼亡〉がう
たわれはじめたことを、この詩は示唆しているのではな
く。權徳輿の「戴公墓誌銘」（『權載之文集』卷二四）に
よれば、戴叔倫ははじめ韋氏、次いで崔氏を娶ったが、い
ずれも早世したという。この詩の「妻」が韋氏と崔氏のい
ずれを指すかはわからないが、詩中に「湘江」とあるので、
湖南での作と思われる。したがって、いま考證は省くが、
七六〇年（二十九歳）以後の作と考えられる。また、戴叔倫
には、これも韋氏崔氏いずれかはわからないが、忘れ形見
の幼い娘を通して亡き妻をしのぶ「少女生日感懷」なる七
律もある。

戴叔倫の詩とほぼ同じ頃に作られたのが、韋應物（七三

詩人と妻（中原）

七—？）の一連の悼亡詩である。^⑧ 韋應物の詩の特徴は、何
はさておき十九首連作というこれまでにない数の多さであ
る。その詩題を煩を厭わず挙げれば、「傷逝」「往富平傷懷」
「出還」「冬夜」「送終」「除日」「對芳樹」「月夜」「歎楊花」
「過昭國里故第」「夏日」「端居感懷」「悲絢扇」「閑齋對雨」
「林園晚霽」「秋夜二首」「感夢」「同德精舍舊居傷懷」とな
る。全體を通してみれば、季節の移り變りを背景に悲しみ
をうたっている點など、基本的には潘岳の影響を強く受け
ているといえるのだが、詩題からも容易にわかるように、
十九首がさまざまに角度を變えてうたわれている點も、ま
たこれまでにないことである。しかし、最も重要なのは、
潘岳をはじめこれまでの作品では妻の死という「現在」に
纏わりついて離れなかった時間が、妻との往時の生活とい
う「過去」へと流れはじめていることである。たとえば、
第一首目の「傷逝」には、次のような句が見える。

結髮二十載 結髮して二十載

賓敬如始來

賓敬 始めて來りしときの如し

提携屬時屯

提携して時の屯なるに屬し

契闊憂患災 契闊して患災を憂う

柔素亮爲表 柔素 亮に表のと爲り

禮章夙所該 禮章 夙に該そなうる所なり

仕公不及私 公に仕えて私に及ばず

百事委令才 百事は令才に委ぬ

韋應物は、結婚以來二十年の間、「公に仕えて私に及ばず、百事は令才に委ね」ることの出來た妻の賢明さを、感謝を込めてうたっている。そして、このことは在りし日の妻の姿や二人の生活の、個別的具體的な形象化へとつながってゆくだろう。われわれはその代表的な例をすでに知っている。いうまでもなく元稹であり、その〈悼亡〉作品は唐代のそのの頂點に立つものといえるのだが、これについて述べるのはまだ早い。いまは、唐代中期、安史の亂後に再び姿を現した悼亡詩に、悲哀の表現の個別化、具象化という變化が兆していることを確認しておこう。われわれはすこし回り道をしなくてはならない。

(二)

韋應物が十九首の悼亡詩を作ってから、おそらくはしばらくして、孟郊（七五二—八一四）も悼亡詩を書く。

悼亡

山頭明月夜

山頭 明月の夜

增光不照重泉下

光を増せど 重泉の下を照らさず

泉下雙龍無再期

泉下の雙龍 再び期する無く

金蠶玉燕空銷化

金蠶 玉燕 空しく銷化す

朝雲暮雨成古墟

朝雲 暮雨 古墟と成り

蕭蕭野竹風吹亞

蕭蕭たる野竹 風に吹きかたむ亞けらる

孟郊の妻についてはわからない。『舊唐書』の傳に「鄭餘

慶鎮興元、又奏爲從事、辟書下而卒、餘慶給錢數萬葬送、

贍給其妻子者累年」とあることから、少なくとも二人の妻

を娶ったことが知れるのみである。したがって、この詩が

いつ作られたかもわからない。詩の内容もこれに相應して

か、具體性に乏しく、韋應物に見えた變化の兆しは見えない

のだが、ここでは孟郊にも悼亡詩があるという事實に留

意しておこう。そして、孟郊の後輩世代に属する劉禹錫（七七二—八四二）にも〈悼亡〉作品があることは、さらに注目しなければならない。

謫居悼往二首（其二）

悒悒何悒悒	悒悒	何ぞ悒悒
長沙地卑濕	長沙	地は卑濕なり
樓上見春多	樓上	春の多 ^{うた} かなるを見
花前恨風急	花前	風の急なるを恨む
猿愁腸斷叫	猿は愁え	腸を斷 ^わ つて叫び
鶴病翹趾立	鶴は病み	趾 ^{あし} を翹 ^あ げて立つ
牛衣獨自眠	牛衣	獨 ^{ひと} 自り眠り
誰哀仲卿泣	誰か哀れまん	仲卿の泣くを

同（其二）

鬱鬱何鬱鬱	鬱鬱	何ぞ鬱鬱
長安遠如日	長安	遠きこと日の如し
終日念鄉關	終日	鄉關を念い
燕來鴻復還	燕來りて	鴻は復た還る
潘岳歲寒思	潘岳	歲寒の思

詩人と妻（中原）

屈平 顓頊 顏 屈平 顓頊の顏
殷勤望歸路 殷勤に歸路を望み
無雨即登山 雨無ければ即ち山に登る

「仲卿」とは後漢の王章のこと。長安で苦學していると病に臥し、ふともなく「牛衣」にくるまり、泣きながら弱音を吐いたのを妻にたしなめられたという。この二首は、「流謫」と「妻の死」というふたつの異常な状況が重なりあっている點で、通常の〈悼亡〉とはすこしく位相を異にしている。したがって、〈悼亡〉だけをテーマにした作品との比較はむずかしいので、いまはしばらく置いておきたい。ただ、「謫居」という状況にあることを考えると、詩中の時間は過去に流れにくいように思われる。制作年については、詩題に「謫居」といい、詩中に「長沙」というのから、劉禹錫が朗州に流されていた時期、すなわち永貞元年（八〇五）から元和九年（八一四）の間で、おそらくはその早い時期としてよいだろう。劉禹錫にはさらに「傷往賦」がある。瞿蛻園『劉禹錫集箋證』は、劉禹錫は薛審の長女を娶っているが、それは繼室であって、この賦の對象は元

配であらうという。ただし、元配については何もわからない。なお、前掲の「謫居悼往」は薛氏であらうと思われるが、確かではない。「傷往賦」は長いのでここでは引かないが、その序は注目しておいてよい。

人之所以取貴於飛走者、情也、而誕者以遺情爲智、豈至言耶、予授室九年而鰥、痛若人之天闕弗遂也、作賦以傷之、冀夫覽者有以增伉儷之重云

人が動物より貴いのは「情」があるからであり、「情を遺る」のが「智」なんかではない。だからわたしは若くして死んだ妻を、賦を作って傷むのだ。これを見る人は、夫婦というものの大切さを一層認識してほしい、というのである。ここには、亡き妻を悼む「情」を表現することへの積極的な姿勢が窺われる。

以上、戴叔倫、韋應物、孟郊、劉禹錫の作品を見てきたが、それは安史の亂後、ほぼ五十年という比較的短い間に作られている。中唐期に入って、〈悼亡〉は共時的現象となってきたのである。しかもそれだけではなく、形式の面からいえば、〈悼亡〉作品は詩や辭賦にとどまらなくなつて

きている。

(四)

獨孤及(七二五—七七)は李華、蕭穎士と並んで初期の古文家として知られるが、その獨孤及に妻崔氏を祭る「祭亡妻博陵郡君文」がある。男性女性を問わず、死者のために墓誌銘や祭文を作るとは古くからある。しかし、管見によれば、夫自らが妻のために祭文を書き、それが傳わっているのは、獨孤及以前にはない^⑨。では、その一部を引こう。

維大曆八年二月十五日、檢校司封郎中兼舒州刺史獨孤及、謹以清酌粢果之奠、祭於故博陵郡君之靈、(略)往歲潞城之會、俱未以少別爲憾、臨岐道舊、坎坎鼓我、酒酣氣振、言盡歡甚、孰知此際、以是永訣、今萬事如昨、書札猶新、惟故人音容、不可復見、悲莫悲兮生離別、況長往之別乎、王事拘限、莫由執紼、卮酒豆肉、後會無期、彼蒼悠悠、逝者何之、長夫長夫、魂兮來於先塋、及爲印綬所拘、不獲親自封樹、豈虞此別、死生間之、往歲方舟偕來、今也單轡獨歸、郊圻一慟、心骨

可絶、頃者萬事、無非去塵、變化茫茫、往矣何道、今也卮酒、將抒永別、尙饗

維れ大曆八年二月十五日、檢校司封郎中兼舒州刺史獨孤及、謹しんで清酌柔果の奠を以て、故博陵郡君の靈を祭る、(略)往歲滁城の會には、俱に未だ少別を以て感と爲さず、岐れに臨んで舊を道い、坎坎として我を鼓す、酒酣にして氣振るい、言盡きて歡甚だし、孰か知らん 此の際、是を以て永訣せんとは、今や萬事昨の如く、書札猶お新し、惟だ故人の音容、復た見る可からず、悲しきは生離別より悲しきは莫し、況や長往の別れをや、王事拘限あれば、縛を執るに由莫し、卮酒豆肉、後會期する無し、彼の蒼きものは悠悠たり、逝く者は何くにか之く、長きかな長きかな、魂よ 先塋に來たれ、及は印綬の拘うる所と爲れば、親自から樹を封ずるを獲ず、豈に虞わん 此の別れ、死生これを問つを、往歲方舟にて偕に來り、今は單輦にて獨り歸る、郊圻に一たび慟き、心骨絶ゆ可し、頃者萬事、去塵に非ざる無し、變化茫茫、往けよ 何をか道わん、

詩人と妻(中原)

今し卮酒もて、將に永別を抒べん、尙わくは饗けよ

大曆八年とは七七三年で、ときに獨孤及四十九歳の作であるが、韻は踏まず、散文で書かれている。引用部分は往事を回想し、職務ゆえに棺に伴って歸れぬ悲しみをいう。内容は、當然ながらすぐれて個人的なことがらを含んでおり、先にのべた悼亡詩の變化に通ずる。そして、獨孤及からしばらく後、符載が「祭妻李氏文」(『全唐文』卷六九二)を書く。全百十二字の短文で、内容も二人の生活に密着したものではなく、どちらかといえば一般化された悲しみの表現になっているが、獨孤及の例が孤立したものではないことを示しているといえる。實は符載には、元和七年(八一二)、潯陽にかりもがりしておいた李氏を鳳翔に改葬したときの「亡妻李氏墓誌銘」(『唐文拾遺』卷二八)があつて、それによつて李氏は貞元十一年(七九五)になくなったことが知れるのであるが、このように夫自身が妻の墓誌銘を綴るのも、祭文と同様に、中唐以前には見當たらぬ。さらに例を挙げれば、王紳も貞元十七年(八〇二)に「周氏墓石」(『全唐文』卷六八四)を書いている。そして、最も注目され

るのは、柳宗元の「亡妻宏農楊氏誌」で、そのはじめに楊氏の家世と幼時から結婚までを述べた後に、嫁いでからの楊氏について次のようにいう。

夫人既歸、事太夫人、備敬養之道、敦睦夫黨、致肅雍之美、主中饋、佐蒸嘗、忱惕之義、表于宗門、太夫人嘗曰、自吾得新婦、增一孝女、況又通家、愛之如己子、崔氏裴氏姊、視之如兄弟、故二族之好、異于他門、然以素被足疾、不能良行、未三歲、孕而不育、厥疾增甚、明年、以謁醫救（當作求）藥之便、來歸女氏永寧里之私第、八月一日甲子、至于大疾、年二十有三、嗚呼痛哉、以夫人之柔順淑茂、宜延于上壽、端明惠和、宜齒于貴位、生知孝愛之本、宜承于餘慶、是三者皆虛其應、天可問乎、衰門多躋、上天無祐、故自辛未、逮于茲歲、累服齊斬、繼纏哀酷、其間冠衣純采期月者、三而已矣、無乃以是累夫人之壽歟、悼慟之懷、曷月而已矣、哀夫、遂以九月五日庚午、克葬于萬年縣棲鳳原、從先塋、禮也、是歲、唐貞元十五年、龍集己卯

夫人既に歸ぎ、太夫人に事えて、敬養の道備わり、夫

の黨に敦睦して、肅雍の美を致す、中饋を主り、蒸嘗を佐けて、忱惕の義は、宗門に表わる、太夫人嘗て曰く、吾新婦を得てより、一孝女を増せりと、況や又た通家、これを愛すること己れの子の如く、崔氏裴氏の姊、これを視ること兄弟の如し、故に二族の好み、他門に異れり、然れども素より足疾を被れるを以て、良く行く能わず、未だ三歳ならずして、孕むも育まず、厥の疾増すこと甚し、明年、醫に謁し藥を求むるの便を以て、來りて女氏の永寧里の私第に歸る、八月一日甲子、大疾に至る、年は二十有三なり、嗚呼痛ましか、夫人の柔順淑茂を以てすれば、宜しく上壽を延くべし、端明惠和は、宜しく貴位に齒ぶべし、生まれながら孝愛の本を知るは、宜しく餘慶を承くべし、是の三者は皆その應虚し、天問う可きか、衰門には疊多く、上天祐くる無し、故に辛未より、茲の歲に逮んで、累ねて齊斬に服し、繼いで哀酷に纏わる、その間に冠衣の純采なること期月なりしは、三たびのみ、乃ち是を以て夫人の壽に累する無からんや、悼慟の懷い、

曷ぞ月なるのみならんや、哀しいかな、遂に九月五日庚午を以て、克く萬年縣棲鳳原に葬る、先塋に従うは、禮なり、是の歳、唐の貞元十五年、龍集己卯なり

墓誌銘であるから、妻の美德をいうのが當然であるなかで、「以素被足疾、不能良行」とありのままに記し、あるいは「衰門多疊」以下で、家に不幸が続いたために心勞が妻の命を縮めたのかと嘆くのは、楊氏のことを書き留めようとする意志と楊氏への哀切の情を窺わせるものである。

柳宗元はその崔簡に嫁いだ姉のための「亡姊崔氏夫人墓誌蓋石文」で、次のようにいっている。

我伯姊之葬、良人博陵崔氏爲之誌、凡歸於夫家、爲婦爲妻爲母之道、我之知不若崔之悉也

我が伯姊の葬には、良人博陵の崔氏これが誌を爲れり、凡そ夫家に歸ぎ、婦爲り妻爲り母爲るの道は、我の知るは崔の悉すに若かざるなり

崔簡もやはり亡き妻柳氏のために自ら墓誌銘を作ったことが知れるのだが、より重要なのは後半部分である。そこには、妻のことは夫が最もよく知っているのだから、自ら

その墓誌銘を作るのは當然であるという意識を、見ることができよう。柳宗元の「亡妻宏農楊氏誌」、さらには符載、王紳の墓誌銘のもつ意味は大きい。宋代になると、士大夫たちが自らすすんで妻の墓誌銘を書くのが当たり前のごとくになるのだが、それは實は中唐に始まっているのである。〈悼亡〉は中唐期に至って、共時的現象となり、士大夫たちは、潘岳以來の詩や辭賦のみならず、墓誌銘や祭文という形式までも使って、亡き妻を語りはじめたのである。そして、すでに觸れておいたように、その頂點に立つのが元稹である。われわれはそろそろ元稹について見てゆかねばならない。

(五)

元稹（七七九―八三一）が元和四年（八〇九）七月に二十七歳で亡くなった妻韋叢を悼んで、三十三首もの詩を作ったことはすでによく知られている。これも煩を厭わず詩題を挙げよう。「夜閑」「感小株夜合」「醉醒」「追昔遊」「空屋題」「初寒夜寄盧子蒙」「城外回謝子蒙見諷」「諭子蒙」「三

遣悲懷」「旅眠」「除夜」「感夢」「合衣寢」「竹簾」「聽庚及之彈烏夜啼引」「夢井」「江陵三夢」「張舊蚊幃」「獨夜傷懷贈呈張侍御」「六年春遣懷八首」「答友封見贈」「夢成之」である。元稹の悼亡詩は、まず數のうえで他を壓倒しているのだが、その特長については、かつて山本和義氏が「元稹の豔詩及び悼亡詩について」(『中國文學報』第九冊)のなかで、代表作「三遣悲懷」の三首を引いて次のように述べられている。適確な指摘と思うのでここに引いてみよう。

詩は、蘅塘退士『唐詩三百首』の編者：引用者のいう如く、「淺近」である。この「淺近」こそが、この詩の最も特長的な點であり、この詩の成功も、又、この點によつてゐる。(略)潘岳の悼亡詩を意識して作られた、元稹のこれらの詩は、それとは對蹠的な特長を、持っている。元稹の詩は、完全に元稹と韋叢との個性の中で、うたわれている。しかも、それは、日常的な平面で、捉えられている。

その例として、まずやはり「三遣悲懷」から第一首を引こう。

謝公最小偏憐女 謝公の最小にして偏憐の女
自嫁黔婁百事乖 黔婁に嫁いでより百事乖る
顧我無衣搜蠹篋 我が衣無きを顧みて蠹篋を搜し
泥他沽酒拔金釵 他に泥りて酒を沽うに金釵を抜か
しむ

野蔬充膳甘長齋 野蔬 膳に充てて長齋を甘しとし
落葉添新仰古槐 落葉 薪に添えて古槐に仰ぐ
今日俸錢過十萬 今日 俸錢 十萬を過ぐ

與君營奠復營齋 君が與に奠を營み復た齋を營む
父の愛情を一身に受けて育つた韋叢が元稹に嫁いだから、常に貧困の生活に甘んじなければならなかった、と二人の結婚生活をふりかえる第一句から六句は、まさに「元稹と韋叢との個性の中で、うたわれ」、「日常的な平面で、捉えられている」。いま、さらに例を挙げれば、次のようなものがある。

昔日戲言身後意 昔日 戲れに言う 身後の意
今朝皆到眼前來 今朝 皆眼前に到りて來る

(略)

尙想舊情憐婢僕

尙お想う 舊情の婢僕を憐れみし
を

也曾因夢送錢財

也た曾て夢に因つて錢財を送る

(三遣悲懷 其二)

四五年前作拾遺

四五年前 拾遺と作り

諫書不密丞相知

諫書 密ならずして 丞相知る

謫官詔下吏驅遣

謫官の詔下りて 吏は驅遣し

身作囚拘妻在遠

身は囚拘と作りて 妻は遠きに在

り

歸來相見淚如珠

歸り來りて相見れば 淚珠の如く

唯說閑宵長拜烏

唯だ説う 閑宵に長に烏を拜す

君來到舍是烏力

君來りて舍に到るは是れ烏の力に

して

妝點烏盤邀女巫

烏盤を妝點して女巫を邀くと

(略)

當時爲我賽烏人

當時 我が爲に烏を賽りし人

死葬咸陽原上地

死して咸陽原上の地に葬らる

(聽庚及之彈烏夜啼引)

詩人と妻(中原)

いずれも在りし日の妻のエピソードやそのことばを書き

留めるものであり、二人の結婚生活という日常性に立脚し

た表現といえる。詩においてこのような表現が出てきたと

いうことは、すでに取り上げたところの自ら妻の墓誌銘や

祭文を書くことと、精神的基盤を共有しているはずである。

そして、このような日常性に立脚した表現に對する評語と

しては、たしかに「淺近」の語がふさわしい。そこで再び

「三遣悲懷」其一にもどるならば、「いま、ようやく經濟

的な基盤を手に入れ、その勞苦に報いることができるはず

だった。しかし、妻はすでになく、お祭りを營んでやるこ

としか出来ない」となげく末二句は、「淺近」の最たるもの

ではなからうか。しかし、その「淺近」さこそ、多くが没

落した名門や下級士族出身の科擧官僚であつた當時の士大

夫の、現實生活に根ざした感慨の表現であつたにちがひな

い。そして、元稹には悼亡詩のほかに、「祭亡妻韋氏文」

なる祭文もあつて、それにも次のようにいう。

始予爲吏、得祿甚微、愧目前之戚戚、每相緩以前期、

縱斯言之可踐、奈夫人之已而

始め子吏と爲りて、祿を得ること甚だ微なり、目前の戚戚たるに愧じ、毎に相緩^{ゆる}うするに前期を以てす、縦い斯の言の踐む可くも、夫人の已みぬるを奈^{いか}んせん

元稹の「淺近」は、實は新しさでもあった。というのも、宋人になるとこのような感慨がしばしばもらされるのであって、たとえば、李觀（一〇〇九—九五九）の「亡室墓誌」（『直講李先生文集』卷三）に、貧を苦にしない妻陳氏の徳を述べた後、「訖不得報以死、悲哉（訖に報いを得ずして以て死す、悲しいかな）」といい、また、許景衡（一〇七二—一一二八）の「陳孺人述」（『橫塘集』卷一九）に、「陳氏從余於憂患艱難中、相與爲辛苦、亦庶幾壽考安寧之報、而制命不淑、得年不永（陳氏は余に憂患艱難の中に従ひ、相與に辛苦を爲す、亦た壽考安寧の報いを庶幾するも、而も制命^{しやうめい}淑^{しよ}からず、得年永からず）」というがごとくである。元稹の〈悼亡〉は中唐を代表するのみならず、宋代につながる。

さらに元稹の悼亡詩の特徴をいうならば、「六年春遣懷八首」を取り上げねばならない。「六年」とは元和六年（八一）で、韋叢のなくなった元和四年からほぼまる二年の

歲月が流れていることになる。元稹は左降の地江陵にあった。妻の死から二年近く経っても、元稹の悲哀はまだ消え去ってはいない。そのことを端的に示すのは、其三の

怪來醒後傍人泣 怪しみ來る 醒めし後 傍らの人

の泣くを

醉裏時時錯問君

醉裏 時時に錯^{あや}まりて君を問えば
なり

という二句であろう。潘岳以來これまでの〈悼亡〉作品は、妻の死後は一年後くらいまでに作られていると思われる。この點において元稹は際立った存在なのである。まして、「夢成之」と題する詩は、陳寅恪『元白詩箋證稿』（二〇三頁）によれば、元和九年の作である。

燭暗船風獨夢驚 燭は船風に暗く 獨夢驚く

夢君頻問向南行 君を夢みれば 頻りに南に向かい

て行くを問う

覺來不語到明坐 覺め來って語らず 明に到るまで

坐す

一夜洞庭湖水聲 一夜 洞庭 湖水の聲

妻を失った悲しみが一年やそこらですっかり消え失せることは、現實にはほとんどあり得ないことだと思いが、時の流れのなかに次第に埋没してゆくことも事實であろう。そうしたなかで、悲哀を持続させ、亡き妻への思いを作品にして書き留めるのは、亡き妻への愛情ゆえなのはいうまでもないだろう。しかし、視点を變えていえば、かつて夫婦として暮らした二人の關係を尊重する、士大夫としての誠實さの表れともいえるのではなからうか。そして、よく知られた例を挙げれば、蘇東坡が亡き妻王氏を、その死後十年を経て夢に見たことをうたった詞「江城子」のごとく、宋代の〈悼亡〉作品は悲哀の持續を特徴とする。元稹はこの點でも宋代士大夫を先取りしているのである。

以上、これまで取り上げた作者をほぼ生年順に並べてみると、獨孤及、戴叔倫、韋應物、孟郊、王紳、符載、劉禹錫、柳宗元、元稹、ということになる。王紳と符載を除けば、すべて中唐の代表的詩人であり、古文家なのである。そして、さらに「祭故室姚氏文」(『全唐文』卷七三八)を書いた傳奇作家、沈亞之(？—八三一?)も加えることができる。

詩人と妻(中原)

る。これら中唐の〈悼亡〉作家を見れば、もはや個人の資質だけでは説明できないだろう。中唐の士大夫には、妻に對する共通した見方、あるいは意識があったと思われるのである。ただ、〈悼亡〉はあくまで死者である妻を對象とする。そこに死者であるがゆえの美化、あるいは淨化の作用が働いている可能性のあるのは否定できない。われわれは中唐の士大夫が、生身の妻についてどう語っているのか、あるいは語っていないのかを、見てゆく必要があるだろう。

(六)

〈悼亡〉は、妻との死別が制作の動機となる。士大夫が生身の妻について、あるいは對して、詩などを作るとしたら、それと同じような状況にあるときがまず考えられる。

つまり「生離別」であるが、多くの場合は二度と會えぬという状況ではなく、旅にあっての作となろう。いま、その種の作品の歴史をたどるとしたら、まず挙げられるのが有名な後漢の秦嘉の「贈婦詩」である。秦嘉が妻の徐淑に贈った詩はすべて四首あり、『玉臺新詠』に見える。卷一の

「贈婦詩三首」(五言)と卷九の「贈婦詩」(四言)である。

これらの詩がいかなる状況の下で作られたのかは、「贈婦詩三首」に短い序がついているので知れる。すなわち、「嘉爲郡上掾、其妻徐淑、寢疾還家、不獲面別、贈詩云爾(嘉郡の上掾と爲る、その妻徐淑、疾に寝ねて家に還り、面別するを獲ず、詩を贈りて爾か云う)」ということであり、妻の病氣とその妻との別離という、二重の状況下で作られた詩であった。^④

次いで挙げられるのは、潘岳の「内顧詩二首」であり、これも『玉臺新詠』の卷二に見える。其一に「漫漫三千里、迢迢遠行客、馳情戀朱顏、寸陰過盈尺(漫漫たり三千里、迢迢たり遠行の客、情を馳せて朱顏を戀い、寸陰盈尺に過ぐ)」とあるように、旅にあって妻を思う詩である。潘岳の後はしばらく見當たらなく、梁の徐悱(?—五二四)まで下る。「對房前桃樹詠佳期贈內」「贈內」(『玉臺新詠』卷六)の二首で、いずれも離れている妻に寄せた詩である。また、同じく梁の劉孝威(?—五四八)に「郡縣遇見人織率爾寄婦」(『玉臺新詠』卷八)、庾丹に「夜夢還家」(『玉臺新詠』卷五)があるが、

これもすべて旅先にあったの詩と考えられる。以上、數量的には少ないが、唐代以前に、離れた妻を思う詩が作られていることは、あたかも〈悼亡〉と同じだといえよう。ただ、この種の詩とは少し異なる詩が若干あるので、検討しておかなければならない。まず挙げるのは、晉の嵇含(二六三—三〇六)の「伉儷詩」(『初學記』卷一四)である。

余執百兩轡

余は百兩の轡たづなを執り

之子詠采蘋

之子は采蘋を詠ず

我憐聖善色

我は聖善の色を憐み

爾悅慈姑顏

爾は慈姑の顔を悦ばす

裁彼雙絲絹

彼の雙絲の絹を裁ちて

著以同功綿

著すに同功の綿を以てす

夏搖比翼扇

夏は比翼の扇を搖らし

冬臥蛩蛩氈

冬は蛩蛩の氈に臥す

飢食竝根粒

飢えては竝根の粒を食らい

渴飲一流泉

渴えては一流の泉を飲む

朝蒸同心羹

朝に同心の羹を蒸し

暮庖比目鮮

暮に比目の鮮を庖さく

挹用合盞醕

挹むに合盞の醕を用い

受以連理盤

受くるに連理の盤を以てす

朝采同本芝

朝に同本の芝を采り

夕掇駢穗蘭

夕に駢穗の蘭を掇る

臨軒樹萱草

軒に臨んで萱草を樹え

中庭植合歡

中庭に合歡を植えん

詩は、妻に對して夫婦和合を説くもので、これまで擧げ

た詩とはたしかに違ふ。しかし、そのうたいぶりは現實の

夫婦の姿を髣髴とさせるものからは程遠い。首二句が、『詩

經』召南、鵲巢の「之子于歸、百兩御之」、同じく召南の

采芣に基づくのを始め、全篇これ夫婦和合を象徵する語彙

から成り立っているのである。いちいち説明はしないが、

「雙絲絹」「同功綿」「比翼扇」「蛩蛩氍」「竝根粒」「一流

泉」「同心羹」「比目鮮」「合盞醕」「連理盤」「同本芝」「駢

穗蘭」「萱草」「合歡」、すべてそうである。ここまで徹底

されると、一種の戲作ではないかと思われてくる。『玉臺新

詠』卷三には、同じ西晉末のひと楊方の「合歡詩五首」が

見えるが、その第一首と第二首のうたいぶりはこの詩とよ

詩人と妻（中原）

く似ている^⑮。嵇含にしても楊方にしても、いかに夫婦和合

を象徵する語彙を集めて詩を作るかという點に、興味が向

けられているように思われる。

次に擧げるのは梁の徐君蒨の二首である。これも『玉臺

新詠』卷八に見える。

初春攜內人行戲

梳飾多今世 梳飾 今世多く

衣著一時新 衣著 一に時新

草短猶通屣 草短く 猶お屣を通し

梅香漸著人 梅香しく 漸く人に著く

樹斜牽錦幃 樹斜めにして 錦幃を牽ぎ

風橫入紅綸 風横さまにして 紅綸に入る

滿酌蘭英酒 滿酌す 蘭英の酒

對此得娛神 此れに對して神を娛ますを得たり

共內人夜坐守歲

歡多情未極 歡多くして 情は未だ極まらず

賞至莫停杯 賞至りて 杯を停むる莫し

酒中挑喜子 酒中に喜子を挑^かげ

粽裏覓楊梅 粽裏に楊梅を覓む

簾開風入帳 簾開きて 風帳に入り

燭盡炭成灰 燭盡きて 炭灰と成る

勿疑鬢釵重 疑う勿かれ 鬢釵重しと

爲待曉光來 曉光の來るを待つが爲なり

二首ともに別離の狀況を背景にせず、日常の一コマをうたっている點で、これまで見てきた作品とは明らかに違う。ただ、惜しむらくは詩題にいう「内人」のイメージがちつとも湧いてこないのも事實である。一首目は春の行樂をうたうのに中心があり、妻には首二句で觸れているが、その姿は同時に行樂に出ている他の女性たちのなかに埋没している。二首目も「守歲」の團樂の楽しみをうたうのに中心があり、妻には末二句で軽く觸れるのみである。そこから妻に對する思ひは傳わつてこない。また、たとえば妻の姿を積極的に形象化しようとする意欲も希薄なようである。やはり、『玉臺新詠』に代表されるような、梁代の文學的雰圍氣のなかで理解すべき作品であるのかも知れない。

以上、唐代以前までをまとめてみると、生身の妻につい

てうたう場合、やはり〈悼亡〉に準ずべき、別離の思いが中心であるといえる。そして、そのような詩が唐代以後も作られて行くであろうことは、想像にかたくない。妻に限らず、別離をうたうのは中國の古典詩の中心テーマのひとつなのであるから。問題は、妻についてうたうにしても、それが別離の思いにとどまるのか、あるいはなんらかの轉換が起きているのか、という點にあるだろう。

(七)

唐代に入っても、事情はしばらく變わらないようで、初期の作品として挙げられるのは、崔融（六五三—七〇六）の「塞上寄内」と蘇頌（六七〇—七二七）の「春晚紫微省直寄内」くらいであろう。前者は五言四句の短い詩で、取り立てていうべきものはない。いささか注目すべきは後者の方である。

直省清華接建章

省の清華なるに直して 建章に接す

向來無事日猶長

向來 事無く 日猶お長し

花間燕子棲鵲鵲	花間の燕子	鵲鵲に棲み
竹下鵲雛繞鳳皇	竹下の鵲雛	鳳皇を繞る
內史通宵承紫詒	內史 通宵	紫詒を承け
中人落晚愛紅妝	中人 落晚	紅妝を愛す
別離不慣無窮憶	別離に慣れざれば	無窮に憶う
莫誤卿卿學太常	誤まる莫かれ	卿卿の太常に學ぶ

と

「建章」「鵲鵲」は漢代の宮殿名を借りたもの。「鳳皇」は宮中の池である「鳳凰池」を指すが、中書省の別稱でもある。また、末句は、「生世不諧、作太常妻、三百六十日、三百五十九日齋、一日不齋醉如泥（世に生まれて諸わざはひは、太常の妻と作ること、三百六十日、三百五十九日は齋、一日齋せざれば酔うて泥の如し）」といわれた、後漢の周澤の故事を使ったもの。詩は、初句から六句までは中書省での宿直のさまをうたい、末二句で妻に對して呼び掛けるという構成になっている。妻への心情はたった二句にしか表現されていないし、離れた妻を思いやる點ではこれまでのものと變わらない。ただ、留意しておきたいのは、宿直は官僚として

詩人と妻（中原）

の日常の職務であり、別に特別な状況ではないことである。そうしたなかで妻に詩を寄せることは、おそらくこれまでになかったことである。しかし、この詩はまだ孤立した例といわねばならない。蘇頲以後、盛唐期においても、状況は初唐期と變わりはなく、妻をうたう、あるいは妻に寄せるといった詩は、ほとんど見出せないからである。それが再び見出だせるようになるのは、盛唐から中唐への境目に活躍した李白（七〇一―六二）と杜甫（七一―七〇）に至ってからである。

李白が妻に多くの詩を寄せているのは、よく知られているところであろう。いま、その詩題を挙げてみると、「秋浦寄内」「秋浦感主人歸燕寄内」「在潯陽非所寄内」「南流夜郎寄内」「別内赴徵三首」「送內尋廬山女道士李騰空二首」「贈内」の十首に及ぶ。このうち「別内赴徵三首」が召されて長安に上るときの留別の作、「送內尋廬山女道士李騰空二首」が旅立つ妻を送る送別の作であるのはこれまでになく、妻に寄せる詩の世界の廣がりを感じさせる。また、「贈内」は制作時の状況はわからないが、妻に對する軽い

戲れの氣持ちを詩にしているのが新しい。

三百六十日 三百六十日

日日醉如泥 日日 醉うて泥の如し

雖爲李白婦 李白の婦爲りと雖も

何異太常妻 何ぞ太常の妻に異ならん

李白の妻に贈った詩は注目に値するのだが、科擧官僚ではなく、また科擧に應じようとした形跡もない李白は、當時の士大夫のなかでも特異なメンタリティーを持っていたのではなからうか。少なくとも現在知れる李白像からは、そういう印象を禁じ得ない。したがって、李白については、いまのところ現象の指摘に止めておきたい。

杜甫は、李白のように直截に妻に寄せたり、妻を語ることとに費やした詩はほとんどない。唯一の例外は「月夜」であらう。

今夜鄜州月 今夜 鄜州の月

閨中只獨看 閨中 只だ獨り看ん

遙憐小兒女 遙かに憐れむ 小兒女の

未解憶長安 未だ解く長安を憶わざるを

香霧雲鬢濕 香霧 雲鬢濕り

清輝玉臂寒 清輝 玉臂寒し

何時倚虛幌 何時か虚幌に倚りて

雙照淚痕乾

雙^{ふた}り照らされて 淚痕乾かん

安祿山の亂の折、長安の賊中であって、鄜州に残してき
た妻と子をもつての作であるが、第二聯を除いて、すべて
妻を對象として詠じられている。ただ、第三聯に見られる
ように、その妻のイメージには、六朝風のなまめかしさの
殘餘が感じられる。しかし、この詩以後、杜甫の詩にしば
しば妻が登場するようになることは留意せねばならない。
かつて吉川幸次郎氏は、この詩の注解の「餘論」で、次の
ように述べられた『杜甫詩注』第四冊、一三三頁。少し長く
なるが、これまでの議論の補足となる点もあるので引くこ
とにしたい（ルビを省略した箇所がある）。

家族に對するこまやかな愛情は、杜詩の一特長である
が、顯著なのは、この詩また次の幼兒を思ふ詩（遺興）
：引用者）などからである。監禁の生活は、この面でも
新しい面を開いた。ことに妻に對するそれは、文學史

の問題でもあろう。夫婦の間の抒情、妻の夫に對するそれは、「詩經」以來豊富であり、六朝の文學ではいわゆる「閨情」として、一つの傳統でもある。しかし夫の妻に對する抒情は、むしろ傳統に乏しい。「詩經」でも、「豳風」「東山」の出征兵士が、「婦は室に嘆かん」という以外、あまり見ない。「文選」では、晉の潘岳が亡妻をいたんだ「悼亡」の詩三首のみが、明瞭であり、不明瞭には、漢の無名氏の「古詩十九首」のあるものがその可能性をもつ。「文選」以外に求めても、漢の秦嘉夫妻の應酬の詩また書簡が、いくぶんの説話を帶びつつ、「玉臺新詠」「古文苑」に見え、「古詩」、焦仲卿の妻の爲めに作る」は、説話の敘事詩化であり、なまの抒情でない。しかるに杜はこの詩にはじまって、以後の詩にも「老妻」「瘦妻」が、しばしばである。その點でも生活の詩人として、晝期を作ったといえる。

安祿山の亂以後の杜甫の詩のなかに、妻の姿がしばしばうたい込まれるのは事實である。その例をいくつか引いてみよう。

詩人と妻（中原）

老夫情懷惡	老夫	情懷惡しく
嘔泄臥數日	嘔泄して臥すこと數日	
那無囊中帛	那んぞ囊中の帛無からんや	
救汝寒凜慄	汝の寒くして凜慄たるを救はん	
粉黛亦解苞	粉黛も亦た苞みを解き	
衾綈稍羅列	衾綈 <small>や</small> 稍や羅列す	
瘦妻面復光	瘦妻 面は復た光 <small>かがや</small> き	
癡女頭自櫛	癡女 頭を自ら櫛けずる	

（北征）

妻孥怪我在	妻孥	我が在るを怪み
驚定還拭淚	驚き定まりて還た涙を拭う	

（略）

夜闌更秉燭	夜闌けて更に燭を秉り
相對如夢寐	相對して夢寐の如し

（羌村三首 其一）

老妻書數紙	老妻の書數紙
應恐未歸情	應に未だ歸らざるの情を恐るべし

（客夜）

いずれもよく知られた詩なので説明はいらないだろう。

とくに「北征」の例からも窺えるように、妻の姿を具體的に形象化することは、たしかに杜甫の特長である。また、それは別離などの特別な事件ではなく、日常の生活のなかのものとしてうたわれている。さらに例を挙げれば、

入門依舊四壁空

門に入れば 舊に依つて四壁空し

老妻親我顏色同

老妻 我を親て顏色同じ

癡兒未知父子禮

癡兒 未だ父子の禮を知らず

叫怒索飯啼門東

叫怒して飯を索め門東に啼く

(百憂集行)

晝引老妻乘小艇

晝は老妻を引いて小艇に乗り

晴看稚子浴清江

晴れには稚子の清江に浴するを看

る (進艇)

老妻畫紙爲碁局

老妻 紙に畫きて碁局を爲り

稚子敲鍼作釣鉤

稚子 鍼を敲いて釣鉤を作る

(江村)

が、そうである。そして、このような例は、杜甫以前にはほとんど見出しがたく、わずかに沈佺期(？一七二三)の「赦

到不得歸、題江上石」に、

翰墨思諸季 翰墨 諸季を思い

裁縫憶老妻 裁縫 老妻を憶う

小兒應離襦 小兒 應に襦を離るべし

幼女未攀筓 幼女 未だ筓を攀かず

というのが挙げられるくらいである。しかし、ここで容易に氣付かれることは、沈佺期の例もそうなのであるが、杜甫の詩に妻が出てくる場合、必ずといってよいほど子供が對になって出てくることである。はじめに挙げた「北征」にしても、その前後の部分は子供の記述で占められているのであり、^①「羌村三首其一」で「相對」するのも、妻のみではなく、子供を含めた家族全員であろう。杜甫の意識は、實は妻よりも子供の方に、より多く傾いていると思われる。「北征」に見える「生還對童稚、似欲忘飢渴(生還して童稚に對せば、飢渴を忘れんと欲するに似たり)」は、そうした意識の表れであろう。杜甫の家族をうたった詩は畫期的なものであるが、その意識における家族の構圖を圖示してみれば、

妻——
夫——子

という形になるのではないか。これが、

妻——
夫——子

という形に移行してゆくものには、いま少しの時間が必要なの
ようである。

(八)

李白、杜甫の後、中唐期に入ると、妻を題材にした詩は
いかなる展開を示しているだろうか。まず、孟郊に「別妻
家」があり、李白にも見えた妻への留別という點で新しい
といえる。しかし、末四句に「孤雲目雖斷、明月心相通、
私情詎銷鑠、積芳在春叢（孤雲 目は斷たると雖も、明月 心
は相通ず、私情 詎ぞ銷鑠せん、積芳 春叢に在り）」とあって、
妻への心情が率直にうたわれていることのほかには、とく

詩人と妻（中原）

に目につく點はない。孟郊におそらく少し遅れるのが、次
に引く彭伉と盧儲の詩で、いずれも『唐詩紀事』に見える。

寄妻
彭伉

莫訝相如獻賦遲 訝る莫かれ 相如の賦を獻ずるこ

と遲きを

錦書誰道淚沾衣 錦書 誰か道わん 涙の衣を沾ら

すを

不須化作山頭石 化して山頭の石と作るを須いず

待我堂前折桂枝 我が堂前に桂枝を折るを待て

官舍迎內子、有庭花開 盧儲

芍藥斬新栽 芍藥 斬りて新たに栽え

當庭數朶開 庭に當たつて數朶開く

東風與拘束 東風 與に拘束して

留待細君來 留めて細君の來るを待たしめよ

彭伉の詩は、科擧及第を待つ妻に與えたものである。な
お、『登科記考』によれば、彭伉は貞元七年（七九二）の進士。
盧儲の詩は、官途について妻を任地に呼び寄せたときの作
で、盧儲は元和十五年（八二〇）の進士である。いずれの詩

も官僚生活を背景に書かれているのであるが、こうした詩が書かれるようになるのが中唐期の特長のひとつなのである。この二首は『唐詩紀事』に見えるため、若干説話臭を帯びていないでもないが、竇羣（七六五—八一四）の「初入諫司、喜家室至」に至っては、官僚である士大夫の生活と感情を生き生きと傳えてくれているといえる。

一旦悲歡見孟光 一旦悲歡 孟光を見る

十年辛苦伴滄浪 十年の辛苦 滄浪に伴う

不知筆硯緣封事 筆硯の封事に縁るを知らずして

猶問傭書日幾行 猶お問う 傭書は日に幾行ぞと

『舊唐書』の傳によると、竇羣は貞元中に處士から召されて左拾遺になっており、詩題に「初入諫司」というのはそのことを指している。「孟光」は「舉案齊眉」で知られる、後漢の隱者梁鴻の妻、「滄浪」は『孟子』離婁篇に基づき、處士であった頃をいうのであろう。官僚になるまでの貧しい暮らし、それを支える手段のひとつは筆耕の仕事であつたらしい。後半二句は、夫が机に向かうのを、相變わらず筆耕の仕事をしていると思ひ込む妻をうたうのである

が、そこからは、長年勞苦をともしてきてくれた妻を少しは樂にしてやれるようになったという、現實生活に根ざしたささやかな安堵の氣持ちが窺える。この詩に描かれるのは、官僚としての士大夫とその妻の、現實生活における姿である。さらに例を挙げよう。

初除浙東、妻有阻色、因以四韻曉之 元稹

嫁時五月歸巴地 嫁せし時 五月 巴地に歸る

今日雙旌上越州 今日 雙旌 越州に上る

興慶首行千命婦 興慶に首行たり 千命婦

會稽旁帶六諸侯 會稽は旁らに帶ぶ 六諸侯

海樓翡翠閑相逐 海樓 翡翠 閑かに相逐い

鏡水鴛鴦暖共游 鏡水 鴛鴦 暖かくして共に遊ぶ

我有主恩羞未報 我は主恩有るも 未だ報いざるを

羞ず

君於此外更何求 君は此の外に於て更に何をか求め

ん

元稹が、同州刺史から越州刺史、浙東觀察使に轉じたのは、長慶三年（八二三）八月であつた。「妻」とは韋叢ではな

く、繼室の裴淑（字は柔之）である。卞孝萱の『元稹年譜』によれば、裴淑を娶ったのは、左遷されて通州司馬の任にあった元和十一年五月のこと、涪州に赴いて結婚したという（二六八頁）。同州は長安と洛陽の間にあったが、ここに、はるか南方の越州への赴任の命が下り、裴淑は越州にゆくのを嫌がった。それを諭して作ったのがこの詩である。第三句には自注があり、「予在中書日、妻以郡君朝太后於興慶宮、猥爲班首（予中書に在りし日、妻は郡君を以て太后に興慶宮に朝し、班首と爲るを猥うす）」という。「予在中書日」とは、長慶二年二月から六月まで元稹は宰相だったので、そのことを指すのだろう。^⑧「翡翠」「鴛鴦」はともに夫婦の仲睦まじさの象徴としてうたわれている。元稹は、南行を溢る裴淑に、官僚としての務めであることを説いて同意を求めるのである。ここで裴淑を非難するのは、読み手として失格であろうし、元稹の本意でもないだろう。陳寅恪『元白詩箋證稿』（二〇六頁）が、「案微之此詩、詞雖美而情可鄙、夫不樂去近甸而就遐蕃、固亦人情之恆態、何足深責」といしながら、「而裴氏之渴慕虛榮、似不及韋氏之能安守貧

詩人と妻（中原）

賤、自可據此推知」とすぐ續けるのはいただけない。官僚生活には當然あり得る節目に際しての、夫婦のやり取りを題材にしたことに意味があるのである。陳寅恪氏のいう「鄙」こそがこの詩の價值であろうし、またそれは先の〈悼亡〉の項で述べた「淺近」にも通ずるだろう。元稹には、このほかに元和四年（八〇九）、東川への途次に都に残してきた韋叢を思ふ詩「望驛臺」、裴淑の琴を弾くのを聞いての作「黃草峽聽柔之琴二首」「聽妻彈別鶴操」がある。^⑨

これまで幾人かの詩を見てきたが、官僚としての現實の生活のなかで、妻への思いをうたい、あるいは妻の姿を描く詩を、數多く作った詩人として最も有名なのは、ほかならぬ中唐のひと、白居易であろう。

白居易（七七一—八四六）の妻は楊氏、友人楊汝士の妹であった。結婚したのは元和の初め、白居易は三十代後半の晩婚であった。以後、彼は楊氏に關わる詩を晩年まで作り續ける。その詳細については、平岡武夫氏に「白居易とその妻」（『東方學報』京都第三六冊）なる一篇があるので、そこらを参照していただくとして、ここではなるべく要を摘ん

で述べることにしよう。まず挙げねばならぬのは、結婚當初に妻に寄せた「贈内詩」である。

生爲同室親 生きては同室の親と爲り
死爲同穴塵 死しては同穴の塵と爲る
他人尙相勉 他人さえ尙お相勉む
而況我與君 而るに況や我と君とをや

(略)

人生未死間 人生まれて未だ死せざる間
不能忘其身 その身を忘る能わず
所須者衣食 須つ所の者は衣食
不過飽與溫 飽と溫とに過ぎず
蔬食足充飢 蔬食 飢に充つるに足る
何必膏粱珍 何ぞ膏粱の珍を必せん
繪絮足禦寒 繪絮 寒を禦ぐに足る
何必錦繡文 何ぞ錦繡の文を必せん
君家有貽訓 君の家に貽訓有りて
清白遺子孫 清白 子孫に遺す
我亦貞苦士 我も亦た貞苦の士

與君新結婚 君と新たに結婚す

庶保貧與素 庶わくば貧と素とを保ち

偕老同欣欣 偕老して共に欣欣たらん

省略したのは、有名な四人の隱者、黔婁、冀缺、陶潛、梁鴻の夫婦を引き合いに出した部分である。この詩の主旨は末二句に端的に表われている。これから貧しくて質素な暮らしで終わるかもしれない。しかし、二人ともに仲良く老いてゆきたい、というのである。言い換えれば、もちろん夫という權威を背にした訓戒という面はあるけれど、妻に自らの生き方に對する同意を求めているのである。少なくともこの詩の世界のなかでは、白居易は楊氏と同じ平面に立っている。そして、母の喪に服した渭村退居の時代、白居易は「贈内」を書く。

漠漠闌苔新雨地 漠漠たる闌苔 新雨の地

微微涼露欲秋天 微微たる涼露 秋ならんとするの

天

莫對月明思往事 月明に對して往事を思ふ莫かれ

損君顔色減君年 君の顔色を損じ 君の年を減ぜん

實にこまやかな愛情の表現であるが、それは元和十年（八一五）の江州左遷の途次、同行する病氣がちの妻に對しても發せられる。

舟夜贈内

三聲猿後垂郷涙

三聲の猿の後 郷涙垂れ

一葉舟中載病身

一葉の舟の中 病身を載す

莫凭水窗南北望

水窗に凭つて南北を望む莫かれ

月明月闇總愁人

月明 月闇 總て人を愁えしむ

そして、江州時代のある日、白居易は妻に對して次のような感慨を洩らす。

贈内子

白髮方興嘆

白髮 方に嘆きを興こし

青娥亦伴愁

青娥も亦た愁いに伴う

寒衣補燈下

寒衣 燈下に補い

小女戲牀頭

小女 牀頭に戯る

閨澹屏帷故

閨澹として屏帷故く

淒涼枕席秋

淒涼として枕席秋なり

貧中有等級

貧中に等級有り

詩人と妻（中原）

猶勝嫁黔婁

猶お勝る 黔婁に嫁すに

白居易は、貧乏にも等級があつて、わたしに嫁したおまえは、まだ黔婁の妻よりはましのようなだ、と燈下に繕いのをする妻に呼び掛けるのだが、その二人のそばには幼い娘が遊んでいる。同じく子供が登場しているけれど、杜甫の場合とはおよそ印象が違うのである。白居易は、妻と己れとの結びつきを通して子供を見ているようだ。また、太和八年（八三四）、六十三歳のときの詩「老去」では、

老去愧妻兒

老い去りて愧うす 妻兒の

冬來有勸詞

冬來 勸詞有るを

煖寒從飲酒

寒を煖めんと 酒を飲むに従すも

衝冷少吟詩

冷を衝いて 詩を吟ずるを少めよ

戰勝心還壯

戦いに勝つは 心還た壯んならんも

齋勤體校羸

齋に勤なるは 體校や羸れん

由來世間法

由來 世間の法

損益合相隨

損益 合に相隨うべしと

と、「作詩」と「齋戒」を控えるように忠告する妻のことばを書き留めているが、このように日常生活のなかでの妻の

ことを記すことも、杜甫まででは見られない。そして、
會昌二年（八四二）、七十一歳のときの作「二年三月五日、
齋畢開素、當食偶吟、贈妻弘農郡君」では、楊氏との偕老
の喜びをうたう。三十八句におよぶ長篇なので、後半部分
のみを引こう。なお、「弘農郡君」は楊氏の封號、「梁高士」
とは梁鴻のこと、「五噫」は梁鴻の作った「五噫歌」のこと
で、『後漢書』の梁鴻傳に見える。

憶同牢齋初	憶う	牢齋を同じうせし初め
家貧共糟糠	家貧しくて糟糠を共にす	
今食且如此	今 食は且つ此くの如し	
何必烹猪羊	何ぞ必ずしも猪羊を烹 ^に ん	
況觀姻族間	況や姻族の間を觀るに	
夫妻半存亡	夫妻 存亡半ばするをや	
偕老不易得	偕老 得易からず	
白頭何足傷	白頭 何ぞ傷むに足らん	
食龍酒一盃	食龍りて酒一盃	
醉飽吟又狂	醉飽すれば 吟も又た狂なり	
緬想梁高士	緬 ^は かに想う 梁高士の	

樂道喜文章 道を楽しんで文章を喜^こむも
徒誇五噫作 徒らに五噫の作を誇って
不解贈孟光 解く孟光に贈らざるを
白居易は、あの梁鴻でさえ「五噫歌」を作って隱遁の意
をうたうばかりで、妻に詩を贈ることはしなかった、と誇
らしげにいう。そこには幾星霜を経て偕老を遂げた喜びが
込められている。

では、白居易は妻というものをどう考えていたか。その
一端を窺える詩があるので、最後に挙げてみよう。寶曆元
年（八二五）、五十四歳の作である。

和微之聽妻彈別鶴操、因爲解釋其義、依韻加四句

義重莫若妻	義の重きは妻に若く莫し
生離不如死	生離は死に如かず
誓將死同穴	將に死して穴を同じうせんと誓うも
其奈生無子	其れ奈んせん 生むに子無きを
商陵迫禮教	商陵 禮教に迫られ
婦出不能止	婦出ださるるも 止 ^と むる能わず
舅姑明且辭	舅姑に明且に辭す

夫妻中夜起

夫妻 中夜に起く

起聞雙鶴別

起きて雙鶴の別るるを聞けば

若與人相似

人と相似るが若し

聽其悲喉聲

其の悲喉の聲を聽くに

亦如不得已

亦た已むを得ざるが如し

青田八九月

青田 八九月

遼城一萬里

遼城 一萬里

徘徊去住雲

徘徊す 去住の雲

嗚咽東西水

嗚咽す 東西の水

寫之在琴曲

これを寫して琴曲に在り

聽者酸心髓

聽く者 心髓を酸ましむ

況當秋月彈

況や 秋月に當たつて彈き

先入憂人耳

先ず憂人の耳に入るをや

怨抑掩朱絃

怨抑 朱絃を掩い

沈吟停玉指

沈吟 玉指を停む

一聞無兒嘆

一たび兒無きの嘆きを聞くとや

相念兩如此

相念うこと 兩つながら此くの如し

無兒雖薄命

兒無きは薄命と雖も

詩人と妻（中原）

有妻偕老矣

妻有りて偕老せり

幸免生別離

幸いに生きて別離するを免がるは

猶勝商陵氏

猶お商陵氏に勝る

「微之」はいうまでもなく元稹の字。詩は、元稹が妻の

「別鶴操」を彈くのを聞いて作つた詩に和したものである。

元稹にはすでに觸れたように、「聽妻彈別鶴操」と題する詩

が残っているが、それは七絶であつて、この詩の詩題にい

うところと合わない。おそらく他に十二韻の詩があつて、

白居易はそれに和したのであらう。「別鶴操」は琴曲で、そ

の由來は『樂府詩集』卷五八に引く晉の崔豹の『古今注』

に見えている。

別鶴操、商陵牧子所作也、娶妻五年而無子、父兄將爲

之改娶、妻聞之、中夜起、倚戸而悲嘯、牧子聞之、愴

然而悲、乃援琴而歌、後人因爲樂章焉

いわゆる「七出」のひとつ、子なき妻は去る、という禮

教のおきてにまつわる悲劇で、古來詩の題材にもなつてき

たものである。白居易は子供に恵まれなかつた。とくにこ

の詩を作つた當時、後繼ぎとなる男の子にはまだ恵まれて

おらず、長男阿崔が生まれたのは太和三年（八二九）であつた（ただし、三歳で夭折）。そうした白居易が發した「義重莫若妻、生離不如死」「無兒雖薄命、有妻偕老矣、幸免生別離、猶勝商陵氏」の語は、白居易の眞情を語っているといえるだろう。

以上、生身の妻に關わる詩においても、中唐期からの變化を認められるだろうし、また「悼亡」と同じように、共時的な横への廣がりを見ることができると思う。そのなかで最も際立つのが白居易であつたわけだが、かれの詩の出現は、決して突然變異的な事件などではなく、その準備は前の世代にすでにできていたのである。われわれは最後に、權德輿の詩を見ることにしよう。これまで述べてきたところを確認できるだろう。

（九）

權德輿（七六一—八一八）の妻は崔氏、貞元のはじめに宰相をつとめた崔造のむすめである。二人の結婚は貞元元年（七八五）の春のことであつた。^④『權載之文集』卷一〇には

三十三首の詩を収めるが、實はそのすべてが妻の崔氏に關わる詩であつて、かつ大まかにではあるが、制作年にしたがつて並べられているのではないかと推測される。^⑤おそらく意圖的に一卷に集められたもので、文集の初期のかたちを傳えているのではないかと思われる。その劈頭にあるのが「祇役江西、路上以詩代書寄内」と題する詩である。權德輿は貞元二年、江西觀察使李兼の辟召を受ける。居地潤州を發つて南下、杭州から浙江を遡つて江西に抜け、洪州の幕に着いたのは貞元三年春のことであつた。その途上、潤州に残してきた崔氏に寄せたのがこの詩である。詩題に「代書」という通り、全六十句の長篇であり、これほど長い詩を妻に寄せた詩人はそれまでいない。いくつかの段に區切つて見てゆくことにしよう。詩は、まずはじめに、妻崔氏への思いをうたう。

辛苦事行役 辛苦 行役を事とし

風波倦晨暮 風波 晨暮に倦む

搖搖結遐心 搖搖として遐心を結び

靡靡卽長路 靡靡として長路に卽く

別來如昨日 別れてより昨日の如く

每見缺蟾兔 毎に蟾兔の缺くるを見る

潮信催客帆 潮信 客帆を催し

春光變江樹 春光 江樹を變ず

宦遊豈云愜 宦遊 豈に愜しと云わん

歸夢無復數 歸夢 復た數うる無し

そして、權徳輿は、日頃の崔氏との談笑をなつかしみ、

その忠言を貴重なものとし、貧窮に甘んじてくれる彼女に

感謝する。

愧非超曠姿 愧ず 超曠の姿に非ずして

循此跼促步 此の跼促の步に循うを

笑言思暇日 笑言 暇日を思い

規勸多遠度 規勸 遠度多し

鶉服我久安 鶉服に我久しく安んずるも

荊釵君所慕 荊釵は君の慕う所なり

一方自らはといえは、本來世務にうとく、病身で、世の

中のことは縁がない。大きな才能を持つてはないのだから、名利を争って身を汚すことなく、隠棲したいのだ、と

詩人と妻（中原）

妻に向かって己れの出處についての考えを語りかけるのである。

伊予多昧理 伊れ予は多く理に昧く

初不涉世務 初め世務に涉らず

適因臃腫材 適たま臃腫の材に因って

成此嬾慢趣 此の嬾慢の趣を成す

一身長抱病 一身 長に病を抱き

不復理章句 復た章句を理めず

胸中無町畦 胸中 町畦無く

與物且多忤 物と且つ多く忤る

既非大川楫 既に大川の楫に非ざれば

則守南山霧 則ち南山の霧を守らん

胡爲出處間 胡爲れぞ出處の間に

徒使名利汚 徒らに名利をして汚さしめん

しかし、家族、親族のあるゆえに、官途には就かねばな

らぬ。

羈孤望子祿 羈孤 子が祿を望み

孩稚待我餉 孩稚 我が餉を待つ

とはいえ、やはり初志は隱棲にあるのだという次の部分
は、妻に了解を求めるがごとくである。

未能即忘懷 未だ能く即ち懷いを忘れず

恨恨以此故 恨み恨むは此の故を以てなり

終當稅襪鞅 終に當に襪鞅を稅くべくも

豈待畢婚娶 豈に婚娶を畢うるを待たん

如何久人寔 如何ぞ 人寔に久しうして

俛仰學舉措 俛仰して舉措を學ばん

詩は、半分以上を妻に直截語りかけることに費やしたの
ち、ようやく敍景に入る。

衡茅去迢遰 衡茅 去りて迢遰

水陸兩馳驚 水陸兩つながら馳驚す

晰晰窺曉星 晰晰 曉星を窺い

塗塗踐朝露 塗塗 朝露を踐む

靜聞田鶴起 靜かに聞く 田鶴の起つを

遠見沙鶉聚 遠く見る 沙鶉の聚うを

怪石不易躋 怪石 躋り易からず

急湍那可泝 急湍 那ぞ泝る可けん

漁商聞遠岸

烟火明古渡

下碇夜已深

上碇波不駐

畏途信非一

離念紛難具

枕席有餘清

壺觴無與晤

こうして敍景を通して旅のつらさをうたい、最後には再
び妻に語りかける。

南方出蘭桂

歸日自分付

北窗留琴書

無乃委童孺

春江足魚雁

彼此勸尺素

早晚到中閨

怡然兩相顧

漁商 遠岸に聞こえ

烟火 古渡に明るし

碇を下せば 夜已に深く

碇に上れば 波駐まらず

畏途 信に一つに非ず

離念 紛として具さにし難し

枕席 餘清有るも

壺觴 與に晤する無し

南方 蘭桂を出だす

歸日 自ら分付せん

北窗 琴書を留む

乃ち童孺に委ねる無からんや

春江 魚雁足し

彼此 尺素を勤めん

早晚か中閨に到り

怡然として兩つながら相顧ん

以上が「祇役江西、路上以詩代書寄内」の全篇である。

この詩は、單に旅にあって妻をなつかしむだけのものではない。權徳輿にとつて、自らの生き方を語りかけるに足る存在で妻はあったと思われる。この詩の後には、「夜泊有懷」「自桐廬如蘭溪有寄」「相思樹」「石楠樹」「斗子灘」「黃蘗館」「清明日次弋陽」の七首がつづくが、すべてこの旅の途上で作られたと思われる。そして、次に擧げる「中書夜直寄贈」からが長安に上つて以後の作である。

通籍在金閨 通籍して金閨に在り

懷君百慮迷 君を懷いて百慮迷う

迢迢五夜永 迢迢として五夜永く

脉脉兩心齊 脉脉として兩心齊し

步履疲青瑣 履を歩ませて青瑣に疲れ

開絨倦紫泥 絨を開いて紫泥に倦む

不堪風雨夜 堪えず 風雨の夜

轉枕憶鴻妻 枕を轉じて鴻妻を憶うに

この詩を皮切りに、權徳輿は宮中に宿直してしばしば妻に詩を寄せている。いま、その詩題のみを擧げれば、「病

詩人と妻（中原）

中寓直代書題寄」「端午日、禮部宿齋、有衣服綵結之貺、以詩還答」「上巳日貢院考雜文、不遂赴九華觀祓禊之會、以二絕句申贈」「太常寺宿齋有寄」「中書宿齋有寄」「冬至日宿齋、時郡君南內朝謁、因寄」の七首に及ぶ。日常の職務に過ぎない宿直の場においても、このように妻に詩を寄せるのは、すでに觸れたように蘇頲に萌芽があったが、權徳輿に至つて完全に常態と化した感がある。

また、權徳輿には、官僚としての榮達の喜びを妻とともに分かち合う詩がいくつかあるのだが、そこに見える感情は、すでに擧げた元稹の「初除浙東、妻有阻色、因以四韻曉之」の詩にも垣間見られるところであった。ここでは、「元和元年、蒙恩封成紀縣伯、時室中封安喜縣君、感慶兼懷、聊申賀贈」と題する、八〇六年、四十六歳のときの詩を擧げてみよう。

啓土封成紀 土を啓いて成紀に封ぜられ

宜家縣安喜 家に宜しくして安喜に縣たり

同欣井賦開 ともに井賦の開くを欣び

共受閨門祉 共に閨門の祉を受く

玳瑁聯采組 玳瑁 采組に聯なり

琴瑟諧宮徵 琴瑟 宮徵に諧う

更待懸車時 更に懸車の時を待ちて

與君歡暮齒 君と暮齒を歡しまん

このような詩はたしかに名譽欲の臭みを感じさせる。したがって、俗として嫌うのは自由である。しかし、そこには、官僚としての生活を支えてくれた妻に對する、感謝の意が込められていると見られるのである。これをも含めて、この詩に表れた感情は權德輿の眞實だったのであり、また、當時の士大夫に通じるものであったに違いない。

次に擧げるのは、「新月與兒女夜坐、聽琴舉酒」と題する詩である。

泥泥露凝葉 泥泥として露は葉に凝り

騷騷風入林 騷騷として風は林に入る

以茲皓月圓 茲の皓月の圓かなるを以て

不厭良夜深 良夜の深きを厭わず

列坐屏輕簾 坐を列して輕簾を屏け

放懷絃素琴 懷いを放ちて素琴を絃く

兒女各冠筭 兒女 各おの冠筭

孫孩遶衣襟 孫孩 衣襟を遶る

乃知大隱趣 乃ち知る 大隱の趣の

宛若滄洲心 宛も滄洲の心の若きを

方結偕老期 方に偕老の期を結べば

豈憚華髮侵 豈に華髮の侵すを憚らんや

笑語向蘭室 笑語 蘭室に向てし

風流傳玉音 風流 玉音を傳う

愧君袖中字 君が袖中の字の

價重雙南金 價 雙南金より重きを愧うす

この詩は、第七、八句に「兒女各冠筭、孫孩遶衣襟」とあるように、子供たちが成人し、孫もできた頃のものである。詩題には「與兒女夜坐」とあり、あたかも子供たちとの團樂をうたうかのようである。しかし、中心は「聽琴舉酒」の方にある。すなわち、琴を弾いているのは妻の崔氏に違いなく、妻の弾く琴を聴きながらの思いをうたうことに中心があるのである。事實、詩の後半はすべて崔氏への語りかけである。末二句の「袖中字」は、「古詩十九首」

其十七の「客從遠方來、遺我一書札、上言長相思、下言久離別、置書懷袖中、三歲字不滅」に、「雙南金」は、晉の張載の「擬四愁詩」の「佳人遺我綠綺琴、何以贈之雙南金」による。權德輿にとつては、妻あつての子供であり、家族だったのである。そして、長年連れ添つた妻と子や孫たちとの團圓のひとときをうたつて、「乃知大隱趣、宛若滄洲心」ということにも注目したい。「大隱」は、晉の王康琚の「反招隱詩」(『文選』卷二二)の「小隱隱陵藪、大隱隱朝市」に基づく。ここには、「朝市」に在るわが身の、家族との團圓を積極的に肯定する姿勢が見出させるのである。さらには、「君が袖中の字」とあるのから知れるように、崔氏はみずから詩を作ることのできるひとであつた。『權載之文集』卷一〇に收められる「酬九日」「和九日從楊氏遊」「和九華觀見懷真院八韻」「酬南園新亭宴會璩新第慰慶之作」の四首は、いずれも崔氏への唱和の作であると思われる。なお、「楊氏姊」とは楊宏微に嫁した崔氏の姉であり、「璩」とは權德輿の長男である。いま、このなかから短篇を一首録しておこう。

詩人と妻(中原)

酬九日

重九共遊娛 重九 共に遊娛し

秋光景氣殊 秋光 景氣殊なれり

他時頭似雪 他時 頭は雪に似んも

還對挿茱萸 還た對して茱萸を挿さん

一般に唐代の士大夫の妻に學問や教養があつたのかどうかについては、まだ斷言はできないのだが、「門當戶對」を重んじる貴族的風潮がなお強く、學問教養のある妻はあまりなかつたし、士大夫の方もそれを望むことは少なかつたようである。²³しかし、中唐期に至ると、白居易の妻楊氏が、結婚當初の「贈内詩」に「君雖不讀書、此事耳亦聞(君は書を讀まずと雖も、此の事 耳に亦た聞かん)」とあるように、學問教養はなかつたであろうこと、また元稹の前室韋叢もそのような形跡のないことなどは、たしかにあるのだが、以後徐々に變化してゆき、またそれが宋代へとつながつてゆくのではないかと思われる。いま、ひとつ興味ある例を引くと、元稹の繼室裴氏は、「酬樂天東南行一百韻」の序に「通之人莫可與言詩者、唯妻淑在旁知狀(通の人は與に詩を言う

可き者莫し、唯だ妻の淑のみ旁らに在りて狀を知る」とあるところを見ると、ある程度の教養があつたようだ。士大夫たちが地方官に出たとき、とくに左遷や流謫で僻遠の地にあるときには、ともに語るべき學問や教養を持ったひととは、身近には少なかったと思われる。そのときに、たとえば詩などを語る相手になれたのは、おそらくひとつには僧侶であり、ひとつには妻だつたのではなからうか。

さて、中唐期の士大夫たちが、妻に關わる詩を作ること、をどのように考えていたのか、その意識が窺える資料が、やはり權德輿にある。それは、親友張薦にあてた「與張祕監書」(『權載之文集』卷四一)である。この書簡は、そのはじめに「頃因從容縱言、遂及義歲與外舅相國有往復書、猥見徵求(頃從容として縱言するに因つて、遂に義歲外舅相國と往復の書有るに及び、徵求せらるるを猥うす)」とあるように、張薦から外舅崔造との往復書簡を見せてくれるように求められたのに對して書かれたものである。權德輿は張薦の求めに應じるのだが、書簡のなかで次のようにいう。

頃年祇役江西、在路有寄內詩一首、音詞蕪陋、顧非士

衡彥先之比

頃年江西に祇役し、路に在りて内に寄する詩一首有り、音詞蕪陋にして、顧みるに士衡の彥先の比に非ず

「寄內詩」とは、先に舉げた「祇役江西、路上以詩代書寄內」を指すに違いなく、また「士衡彥先」とは、晉の陸機が顧彥先に代わつてその妻に贈つた詩「爲顧彥先贈婦」二首を指し、『玉臺新詠』卷三に見える。權德輿は、すすんで自らが妻に寄せた詩を張薦に見せているのである。そして、張薦の方も、『權載之文集』に付載される返書のかで、これを「繼美彥先之句(美を彥先に繼ぐの句)」といつて、他の作品とともに、

諷而誦之、寶而藏之、有以見六義昭宣、百行醇備、名稱赫赫、宜乎哉

諷としてこれを誦し、寶としてこれを藏す、以て六義の昭宣たり、百行の醇備たるを見る有り、名稱の赫赫たる、宜なるかな

と譽めているのである。このように、生身の妻に寄せた詩を友人に見せることは、この時期になると別に憚られるこ

とはなくなっていたようなのである。白居易にも、元稹が旅先で妻の韋叢に寄せた「望驛臺」の詩に和した詩があるのも、そうした意識のなせるわざと思われる。

以上、本稿で取り上げた作者の主なものを通じてみれば、獨孤及、戴叔倫、韋應物、孟郊、權德輿、劉禹錫、白居易、柳宗元、元稹、沈亞之、となる。彼らは八世紀後半から九世紀前半、すなわち大曆から貞元、元和の時代に活躍した、中唐を代表する詩人であり、古文家なのであった。そこで、これまで述べてきたところを簡略にまとめてみれば、中唐の士大夫たちは、〈悼亡〉に限らず、妻を描き、あるいは妻に寄せる作品を書くのに躊躇しなくなっており、かつその内容にもかなりの變化が起こっている、ということになる。そして、このことは、當時の士大夫たちの意識にある共通した變化が起きていることを、おそらく示唆しているのである。

むすびにかえて

中唐という時代には、さまざまな面において、さまざま

詩人と妻（中原）

な變化が生じたと思われる。その變化をもたらした最大の要因は、やはり安史の亂であろう。とくに官僚として國家とひとびとの運命に責任を負うべき存在である士大夫たちにとって、安史の亂のもつ意味は大きかったに違いない。

玄宗皇帝の治下、搖るぎないはずであった世界帝國が、いとも簡単に國都を陥れられて崩壊に瀕したのである。この未曾有の混亂が、士大夫たちの意識に變化をもたらしたことは想像に難くない。中唐の士大夫たちはそれをさまざまなかたちで表したのだと思われる。たとえば、文學や學問、思想の分野でいえば、古文運動、新春秋學の興起なども、單に個別の事象としてみるよりも、當時の士大夫たちに通底する意識の表れという觀點から捉えるべきではなかろうか。また、僧侶とても基盤となる學問教養は儒家のものだったはずで、馬祖道一による實踐を核にした禪宗の成立と興隆も、同様の觀點を据えることができるのではなかろうか。そして、そうした意識の變化は、男女間の愛情の表現からも見て取れる。たとえば、「李娃傳」をはじめとする傳奇小説が、現實世界の男女の戀の物語を語りはじめたの

も、士大夫が男女の愛情という非常に個人的な、悪くいえば小さな世界にも、それを描き表現する價值を見出だしたからにほかなるまい。また、白居易の「長恨歌」がよしんば諷諫の意圖を持つにしても、そこに描かれた愛のかたちは、常人を超越した帝王の世界のものではなく、やはり常人の日常世界におけるそれとなんら變わらぬものであった。本稿で取り上げてきた、自らの妻を描き、自らの妻への愛情を表白する作品群も、士大夫の意識に通底するもののひとつの表れと見做せると思う。中唐の士大夫たちは、個人としての生活やそこから生じる私的な感情を、價値の劣るものだと見做さなくなったのである。私的な生活や感情も、やはりかれらの世界の一部であり、それは官僚としての公的な世界に對置し得るものであった。「獨善」と「兼濟」は、なにも白居易ひとりの問題ではなかったし、兩者は對立概念から並立概念へと變化しはじめたのである。時代は近世に入りつつあった。

注

① たとえば、陳寅恪『元白詩箋證稿』には、「吾國文學、自

來以禮法顧忌之故、不敢多言男女間關係、而於正式男女關係如夫婦者、尤少涉及。蓋閨房燕昵之情意、家庭米鹽之瑣屑、大抵不列載於篇章、惟以籠統之詞、概括言之而已。」（一九七八年、上海古籍出版社版、九九頁）という。

② 宋人と妻に關しては、拙稿「夫と妻のあいだ——宋代文人の場合——」（『中華文人の生活』平凡社）を参照されたい。なお、本稿の對象とするのは正妻であり、妾（側室）には立ち入らない。士大夫の意識のなかでは、正妻と妾とは一線が畫されていたと思う。士大夫と妾の關係は、また別の角度から考えねばならない問題であろう。

③ 高橋和巳「潘岳論」（『中國文學報』第七冊）、松本幸男「潘岳の悼亡詩」（『學林』第三號）、興膳宏「潘岳陸機」（筑摩書房、中國詩文選10）、齊藤希史「潘岳悼亡詩論」（『中國文學報』第三十九冊）などを参照されたい。

④ 『世說新語』文學篇の劉孝標の注に見える。

⑤ 「悼亡詩について——潘岳から元稹まで——」（『入矢教授小川教授退休記念中國文學語學論集』）

⑥ これまであげた悼亡詩のほとんどが、注⑤入谷論文および後掲注⑧深澤論文ですでに言及されている。

⑦ 五逢暉日今方見、置爾懷中自惘然、乍喜老身辭遠役、翻悲一笑隔重泉、欲教針線嬌難解、暫弄琴書性已便、還有蔡家殘史籍、可能分與外人傳。

⑧ 韋應物的悼亡詩の專論としては、深澤一幸氏に「韋應物の

悼亡詩」(『鷗風』第五號)がある。また、注⑤の入谷論文も参照。なお、韋應物の妻については何もわからないが、深澤氏によれば、その死は永泰元年(七六五)から大曆十年(七七五)の間である。

⑨ 羅聯添「獨孤及年譜」(『唐代詩文六家年譜』所收)は、獨孤及の妻について誤解があるようだ。「前左驍衛兵曹參軍河南獨孤公故夫人韋氏墓誌」(『全唐文』卷三九一)の韋氏は、及の兄、巨の妻である(『獨孤及墓誌』参照)。獨孤及は崔氏の死後、繼室(姓は不明)を娶り、朗と郁が生まれている。なお、孤立した例であるが、顯慶(六五六―六〇)のひとつ、顯升に、亡き妻の遺品に寄せた「瘞琴銘并序」と「題妻莊寧書心經後」(『全唐文』卷二〇〇)があるのは注目される。

⑩ ただし、符載と王紳の墓誌銘は石刻資料(平岡武夫等編『唐代の散文作品』によれば、それぞれ『八瓊室金石補正』と『古誌石華』に出る)として傳わり、柳宗元のは文獻資料として傳わったものである。墓誌は石に刻んで墓に埋めてしまうので、それが出土しなければひとの目に觸れない。したがって、夫が妻の墓誌を書くことは中唐以前にもあった可能性は否定できない。しかし、柳宗元のように文獻資料として傳わるものが、中唐以前にはないだろうことは大きな意味があると思う。すなわち、作者が他人に讀まれることを承知して書いた場合が多いと考えられるからである。

⑪ 注②拙稿参照。

詩人と妻(中原)

⑫ 至第參拾參首夢成之云：(略)則疑是元和九年春之作。何以言之、元氏長慶集壹捌盧頭陀詩序云：元和九年張中丞(正甫)領潭之歲、予拜張於潭。同集貳陸何滿子歌云：我來湖外拜君侯、正值灰飛仲春琯。蓋微之於役潭州、故有「船風」「南行」及「洞庭湖水」之語也。

⑬ 詳しくは拙稿「蘇東坡の悼亡詞について」(『人文學論集』第二四號、佛教大學學會)および注②拙稿を参照されたい。

⑭ 『玉臺新詠』卷一には徐淑の「答詩」も見える。また、二人の間の往復書簡なるものも傳えられている(『藝文類聚』卷三二)。

⑮ 「合歡詩」其一と其二自體が同工異曲なのだが、いま、「伉儷詩」と類似する句を引けば、「食共竝根穗、飲共連理杯、衣用雙絲絹、寢共無縫襦」「齊彼同心鳥、譬此比目魚」「寢共織成被、絮用同功綿、暑搖比翼扇、寒坐併肩氈」「齊彼蛩蛩獸、舉動不相捐」となる。

⑯ 「北征」の該當部分を引いておく。
經年至茅屋、妻子衣百結、慟哭松聲回、悲泉共幽咽、平生所嬌兒、顏色白勝雪、見耶背面啼、垢膩脚不韞、牀前兩小女、補綻纔過膝、海圖坼波濤、舊繡移曲折、天吳及紫鳳、顛倒在短褐
學母無不爲、曉妝隨手抹、移時施朱鉛、狼藉畫眉闊
例外は、引用した「客夜」と「寄題江外草堂」くらいであろう。

⑰ この詩の持つ別の意義については、かつて小川環樹先生が「書店と筆耕——詩人のくらし——」（『風と雲』所収）で論じられた。

⑱ 命婦朝参のことは、『唐會要』卷二六の「命婦朝皇后」の條を参照。

⑲ 可憐三月三句足、悵望江邊驛臺、料得孟光今日語、不曾春盡不歸來

⑳ 胡笳夜奏寒聲寒、是我鄉音聽漸難、料得小來辛苦學、又應知向峽中彈（黃草峽聽柔之琴其一）

別鶴淒清覺露寒、離聲漸咽命難難、憐君伴我涪州宿、猶有心情徹夜彈（黃草峽聽柔之琴其二）

別鶴聲聲怨夜絃、聞君此奏欲潸然、商瞿五十知無子、便付琴書與仲宣（聽妻彈別鶴操）

㉑ 權德輿の閑歷については、拙稿「權德輿年譜初稿」（『西北大學學報』一九九三年第四期）によっている。

㉒ 河内昭圓氏に「權德輿の贈婦詩について」（『大谷學報』第六三卷第二號）があり、卷一〇の詩の「大半は妻に寄せた詩であり、あるいは妻を意識した作である」とされるが、不十分であろう。いま、三十三首の詩を逐一説明するのは避けるが、すべて妻に関わる詩である。

㉓ たとえば、高世瑜『唐代婦女』（一四七頁）には、「唐代婚姻又很重視門當戶對、『當色爲婚』。不僅良賤絕不能通婚、良民中也多是同一階層通婚。唐代雖不象前代士、庶界限那樣嚴

格、婚姻圈那樣封閉、但士庶族望觀念仍然十分強烈。（略）女子被人挑選的資本則一在容色、二在錢財」という。

㉔ 元稹の「望驛臺」は注⑲に引いた。ここには白居易の和唱を挙げておく。

靖安宅裏當窗柳、望驛臺前撲地花、兩處春光同日盡、居人思客客思家（酬和元九東川路詩十二首、望驛臺）

㉕ 道一などの禪宗と中唐士大夫との関わりについては、西脇常記氏に「中唐の思想——權德輿の周邊——」（『中國思想史研究』第二號）があるので、参照されたい。なお、權德輿の「祇役江西路上以詩代書寄內」詩のなかに見える「章句」についても、同論文を参照されたい。

〈付記〉 作品の調査には、主として嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』、『全唐文』、『全唐詩』を用いた。なお、紙幅の関係で、出處や原文を省略したものがある。また、人名には、不明の者を除いて生卒年を付したが、煩雑になるので據るところは示していない。